

生薬ニュース

近畿大学東洋医学研究所附属診療所調剤室

今月のピックアップ

かんぞう
甘草



カンゾウとは・・・

カンゾウ : *Glycyrrhiza uralensis*, *Glycyrrhiza glabra* とは、



マメ科の植物の根およびストロン（地上近くを這って伸びる茎、匍匐茎（ほふくけい）や走出枝（そうしゅつし）とも呼ばれる）のことで、シルクロードに沿って分布しており、イラン、アフガニスタン、カザフスタン、ウズベキスタン、パキスタン、ロシア～中国などで生育されています。

葉は、左の写真のように、マメ科特有の羽状複葉（うじょうふくよう）を呈しており、また、葉の端が波打っているのも特徴です。

古代から広く薬用に使われており、西洋ではテオフラストス（紀元前287-372年）によってその著書に紹介されています。日本へは奈良時代に唐から渡来しました。

カンゾウはその名の通り、甘いため、『矯味』で使用されることもしばしばですが、他に消炎・解毒やのどの症状などにも使用されます。

【性味】 甘・平

【薬効】 清熱解毒・利咽止痛

カンゾウの主な成分

カンゾウの主成分はグリチルリチン酸でその主な薬理作用は抗炎症作用や免疫調節作用などがあります。また、グリチルリチン酸単独では医薬品として慢性肝炎などの肝疾患の治療にも用いられます。このグリチルリチンの甘味はショ糖の150～200倍以上とされ、医薬品、漢方の矯味成分として使用されるほか、しょうゆや煙草の甘味料としても大量に消費されています。

ラテン名の uralensis（ウラレンシス）はウラル山脈からつけられており、また、もう一つの glabra（グラブラ）は『リコリス（Liquorice）』という名で西洋では親しまれ、のど飴やグミとしてお菓子売り場でもみかけることができます。それぞれ『ウラルカンゾウ』や『スペインカンゾウ』などと呼ばれることもあります。

カンゾウを含む方剤・・・

かっこんとう

葛根湯（感冒、肩こりなど）

かみきひとつ

加味帰脾湯（体力が低下した人の精神不安など）

しゃくやくかんぞうとう

芍薬甘草湯（こむら返り）

じゅうぜんたいほとう

十全大補湯（病後の体力低下、食欲不振）

しょうさいこうとう

小柴胡湯（感冒、慢性胃腸炎、慢性肝炎）

りょうけいじゅつかんとう

苓桂朮甘湯（めまい、耳鳴り）



カンゾウを取り巻く問題

カンゾウは近年価格が高騰しています。この原因として、中国国土の砂漠化が挙げられます。

カンゾウは過酷な環境のもと、上記で述べたように、水源を求めどどん根を垂直・水平方向に伸ばしていきます。これを掘り起こしたあと、その穴を埋めずそのまま放置するため、その一帯の砂漠化が進行していくのです。このため、1984年に中国は、野生のカンゾウをみだりに掘ることを禁止しました。それでも砂漠化を止めることができず、さらに2000年、カンゾウの採取・販売を許可制とする通知が出され、規制が一層進みました。

栽培でカンゾウを生育させようとする、根が長く伸びず、また野生品と比較して白っぽい色を呈し、グリチルリチン酸の含有量も低くなってしまいます。土壌に塩などを混ぜて栽培することもあるようですが、一般的ではないようです。

上の『カンゾウを含む方剤』にも示している通り、カンゾウは多種多様な方剤にその作用はもちろん矯味剤としても使用されていることから、漢方薬にとってなくてはならない生薬の一つです。そのために中国の環境問題の悪化を引き起こしている現状を何とか打開できるよう、生薬にかかわるものとして今後の展開に注視する必要があります。

2023年2月第6号